その考えも、気持ちも。
たくさん読んで
蓄えた言葉で、
形にしていくものなんだ。

全ての言葉に、全ての中学生が
今すぐ納得することはないかもしれない。
今日、読む文章の意味が分かるのは、
明日かもしれないし、来年かもしれないし、
もしかしたら数十年後になるかもしれない。

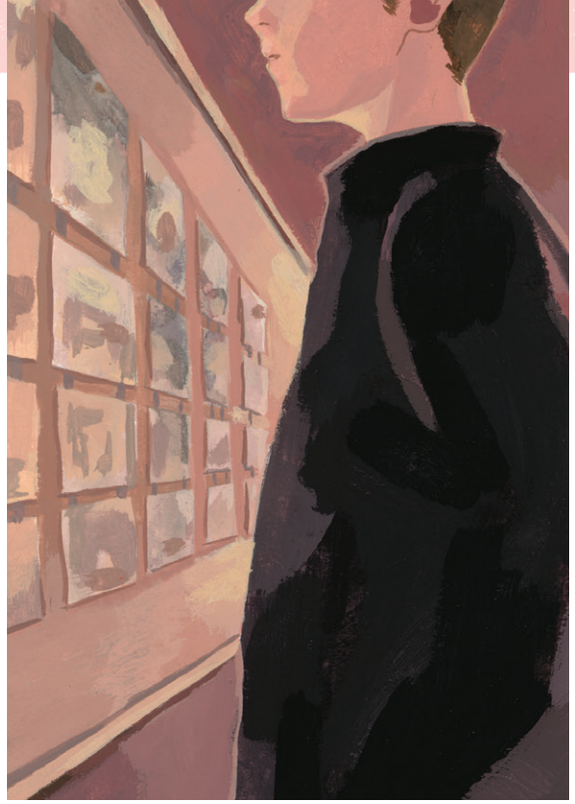
書いてある文字を
ただ、なぞることしかできない。
ときには、そんなこともあるかもしれない。

それでもいい。
言葉を使って生きていく、
これからのために。
頭に、心に、
蓄えておいてほしい言葉がある。

「新しい国語」読み物のご案内

東京書籍

この資料は、令和3年度中学校教科書の内容解説資料として、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。



2年 新 辞書に描かれたもの

澤西祐典

上野がなぜあれほど熱心に
辞書を見ていたのか分かった気がした。

目を輝かせて古びた辞書を読む友人の上野に、不思議ないらだちを感じる「私」。しかし、彼が描いた絵を見て、彼が見ていたものを悟る。言葉と、世界との向き合い方に気づく物語。

1年 飛べ かもめ

杉 みき子

あの鳥は、
懸命に羽ばたいている。
前進している。
自分の意思と力だけを頼りに。

2年 卒業ホームラン

重松 清

努力すれば報われる、
とは限らない。
それでも。
信じることは
できるかもしれない。

新…新規掲載作品

中学生の、今に寄り添う

3年 百科事典少女

小川洋子

なかでも彼女が愛したのは、百科事典だった。

アーケードのいちばん奥にある、読書休憩室。そこには、百科事典を愛する一人の少女がいた。——早すぎる死を迎えた彼女と、その思いを受け継ぐ父とが織り成す物語。細やかに選びぬかれた言葉が、静謐な作品世界を紡ぎ出していく。

1年 さんちき

吉橋通夫

——おらも、いっしょに作ったんやで！
自分が任された
カシの木の一本の矢が、
白く輝いて見えた。

3年 風の唄

あさのあつこ

「描きたくて。」
映子の顔が上がる。
頬が薄桜の色をしていた。

色あせることのない、東西の名作がある

1年 少年の日の思い出　ヘルマン・ヘッセ／高橋健二・訳

2年 走れメロス　太宰　治

3年 故郷　魯　迅／竹内　好・訳

1年 トロッコ　芥川龍之介

2年 坊っちゃん　夏目漱石

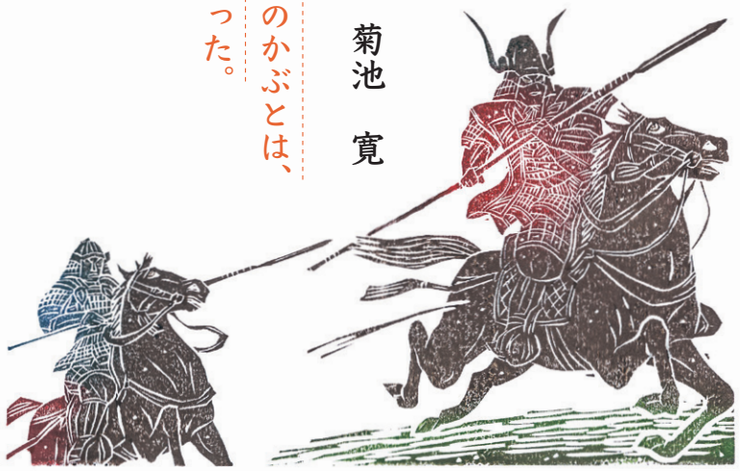
2年 カメレオン　アントン・チェーホフ／原　卓也・訳

3年 最後の一句　森　鷗外

「お上のことには間違いはございますまいから。」

3年 形　菊池　寛

猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であった。



言葉を知り、言葉を考える道筋がある

2年 新 手紙の効用　若松英輔

口では言えないことだけでなく、書く前は思ってもみなかったことが言葉になって出てくる。手紙は私たちの中にあって隠れていたものをあらわにする。

1年 話し方はどうかな　川上裕之

3年 二つのアザミ　堀江敏幸

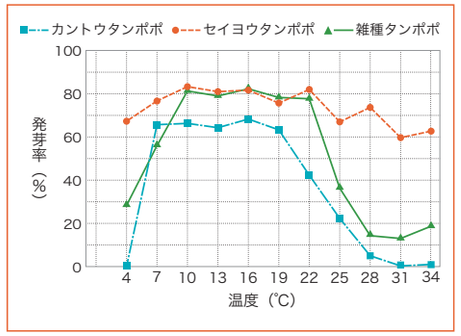
1年 ニュースの見方を考えよう　池上　彰

2年 「正しい」言葉は信じられるか　香西秀信

ニュースは「客観的なもの」だと、思ってはいないだろうか。「正しい」言葉で表されているのだから「事実」だと、信じ込んでいないだろうか。メディアから発信される言葉について改めて考えてほしい。

文章と合わせて、図表を読み解く

1年 新 私のタンポポ研究　保谷彰彦



世界中の研究者が憧れるタンポポの国、日本。しかし、異変は既に起きていた……。

日本に外来のタンポポが侵入してきている。そう聞いたことがある人もいるかもしれない。しかし、タンポポの国の異変はもっと複雑で、深刻だった。

2年 スズメは本当に減っているか　三上　修

評論文を読み比べる

2年 黄金の扇風機　田中真知

サハラ砂漠の茶会　千住　博

「美」とは何か。それぞれに異文化を体験した二人の筆者の考えたこと、感じたことは大きく異なっていた。二つの評論文を比べ、自身の体験とも結び付けながら考えを掘り下げたい。

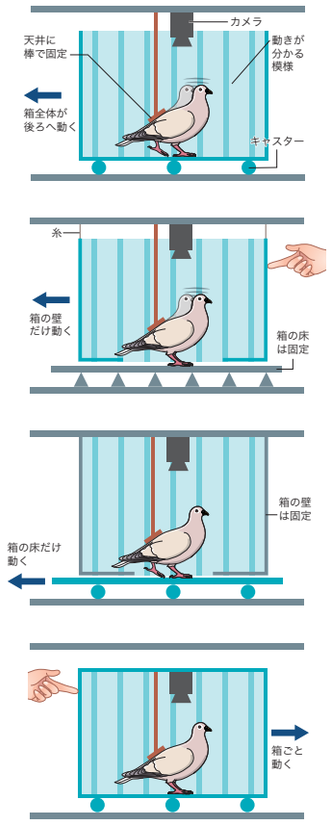
3年 新 自然との共存――小笠原諸島

世界遺産に登録されるほどの豊かな自然。増加する観光客とともに持ち込まれる外来種。観光業を営む島の住人の暮らし。山積する課題に解決の糸口は、果たしてあるのか。記事やグラフ、広告などの資料を読み、絶海の楽園の未来に考えを巡らす。

2年 新 ハトはなぜ首を振って歩くのか　藤田祐樹

ハトが歩く姿を見ていると、いつでもどこでもぴょこぴょこと首を振って歩いている。その理由が気になってしかたないという人は、案外多いようだ。

なぜ、ハトは無駄とも思える首の動かし方をするのだろうか。筆者は歴史ある海外の研究を紹介しながら、首振りの謎を解き明かしていく。



ものの見方・考え方を鍛える

3年 新 幸福について　野矢茂樹

「お金がなければ幸福は手に入らないよ。」

「そうかなあ。幸福っていうのは喜びを感じることだと思うな。」

散歩の途中の木陰で、筆者は「幸せ」についての会話を耳にした。文中で明らかになる「議論の仕方のだいじな技術」をもとに、教室でも「主体的・対話的で深い学び」を実現したい。

1年 オオカミを見る目　高槻成紀

1年 「常識」は変化する　古田ゆかり

一人一人が輝く、持続可能な社会を目指して

「新しい国語」は、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の達成に資する作品を積極的に掲載しています。ＳＤＧｓは、二〇一五年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」に示されている、持続可能でよりよい世界を目指すための、二〇三〇年までの十七の国際目標です。

人権・福祉

1年 新 風を受けて走れ

佐藤次郎

走ることを取り戻す。
そこから、
何かが始まるはずだ。

義足使用者が走れるわけがない。それが当時の常識だった。しかし、義肢装具士の臼井二美男は挑戦を続けた。走ることが、それぞれの人生の幅を広げると信じて。

1年 そこに僕はいた　辻　仁成

伝統・文化

2年 鰹節――世界に誇る伝統食

小泉武夫

キャリア教育

3年 何のために「働く」のか

姜　尚中

もし、お金があったら、
人は「働く」のを
やめるでしょうか。

環境

3年 絶滅の意味

中静　透

国際理解

3年 新 恩返しの井戸を掘る

坂本　達

彼は、見ず知らずの僕を
村の最後の薬で救ってくれた。
僕が彼にできることは、何だろう。

自転車世界一周の旅の途中、僕はギニアでマラリアにかかってしまう。親身になって看病し、貴重な薬で僕の命を助けてくれたのは、村の医師シェリフだった。今度は僕が、安全な水を手に入れるための井戸を掘る。

防災・安全

3年 いつものように新聞が届いた――メディアと東日本大震災

今野俊宏

記者たちは今もなお震災と向き合い、
伝え続けている。

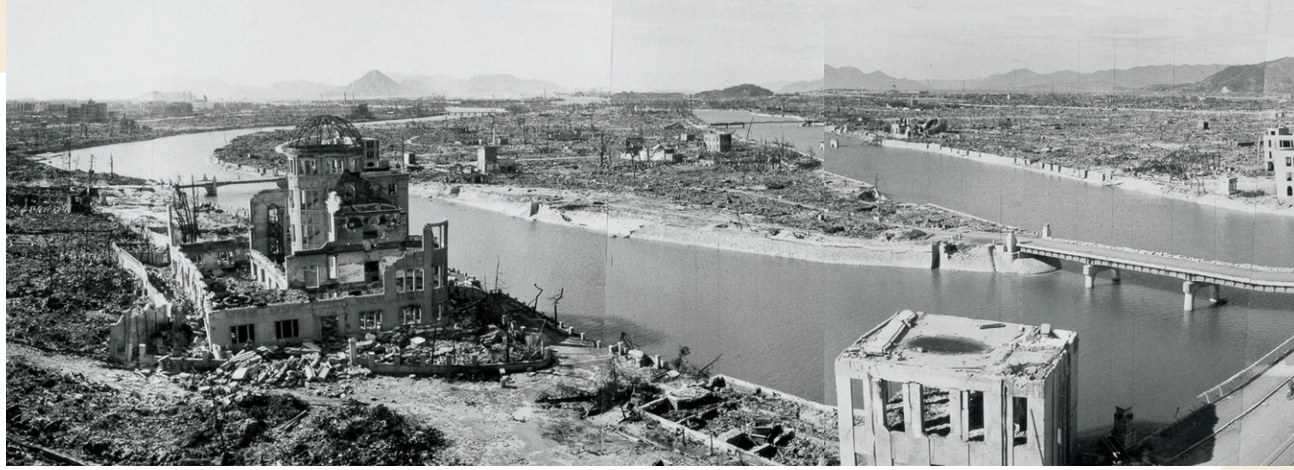
東日本大震災 きょう８年

街に注ぐ光 信じ歩む

暮らし向き 復興足踏み

「厳しく」30％に悪化

河北新報社 ネット共同調査



恒久の平和を願う

平和

1年 碑

制作・広島テレビ放送
構成・松山善三

昭和二十年、
八月六日の日の出は、
午前五時二十四分、
朝から暑い夏の日でした。

原爆の犠牲となった、三百二十一人の、広島二中の一年生。彼らは最期に、誰を思い、何を願ったのか――。生きていることの尊さを、改めて考えたい。ドキュメンタリーだからこそ、心に深く突き刺さる。

2年 字のない葉書　向田邦子

「元気な日はマルを書いて、
毎日一枚ずつポストに入れなさい。」

2年 わたしが一番きれいだったとき　茨木のり子

3年 生ましめんかな　栗原貞子

時のかなたに、思いを馳せる

1年 新 移り行く浦島太郎の物語

浦島太郎はなぜ、
おじいさんになったのか。

亀は子供たちに、いじめられてはいなかった？　浦島太郎が行ったのは、竜宮城ではなく蓬莱山だった？

悠久の昔から受け継がれ、今なお変わり続ける浦島太郎の物語をきっかけに、古典を学ぶ意味について考えたい。

2年 新 書き手の肖像
――清少納言と兼好法師　中野貴文

華やかな宮中の様子を描き出した清少納言と、名もなき人の言葉に耳を傾けた兼好法師。彼らの生き方とは。

2年 新 望郷の詩――杜甫と李白　川合康三

3年 新 恋歌をよむ　吉田幹生

たった三十一文字の中に、
どうやって恋を表現すればいいのだろう。

3年 「おくのほそ道」の旅　深沢了子

日本語の粋を集めた言葉たちが教科書のさまざまなページで待っている

詩歌の鑑賞

1年　詩の心――発見の喜び　嶋岡　晨
2年　短歌を楽しむ　道浦母都子
3年　俳句の読み方、味わい方　片山由美子
　　俳句五句

扉の詩歌と写真

巻頭詩

1年　風の五線譜　高階杞一
2年　未来へ　谷川俊太郎
3年　生命は　吉野　弘

日本語のしらべ

1年　月夜の浜辺　中原中也
2年　落葉松　北原白秋
3年　初恋　島崎藤村

詩の言葉

新

1年　わたしの中にも　新川和江
2年　わたしが一番きれいだったとき　茨木のり子
3年　レモン哀歌　高村光太郎
3年　生ましめんかな　栗原貞子